



小杉画伯が単独で
安土城内の名刹再建
今秋落慶式を挙げる總見寺

織田信長の遺跡として知られてゐる滋賀県蒲生郡の安土城址は数年前文部省から史蹟として指定され、その城址にある遠景山總見寺は信長の本願で、臨濟宗剛可和尚が開基し、今も信長父子の像を安置する名刹であるが、荒廢に帰して、唯僅かに豊臣秀頼が寄進した三層塔と楼門だけが残つて特別保護建造物となつてゐるばかり。本堂もない有様のところ、五年ほど前信長を崇拜してゐる小杉放庵画伯が此の地に遊び、その六角臺の眺望の雄大さに驚くと共に、信長の本願たる總見寺の荒廢を惜しみ、住職松岡範宗師の請を容れて単独で同寺の本堂建立を引受け、爾来同寺の為に尺五の

絹本力作を揮毫すること数十点に及び、その資を以て建築に着手し工事を進めてゐたが、此の程漸く竣工したので画伯は更に、但馬の應舉寺の如く、その内部の襖絵、壁画等総て自分一人で引受けこれが揮毫を決意し、三月末安土に赴き留まること二旬余、三十余枚の中、十枚の揮毫を完成して帰京したが、此の秋十月頃を期し、信長崇拜の士を糾合し盛大な落慶式を挙行し、当日は豊公北野の大茶会を偲ばせる為め、益田孝男その他が安土全山を使つて一大茶会を催すべく計画してゐる。

右に就いて放庵画伯は語る。「私の微力で建立したのであるから大きなものではないが、兎も角も由緒ある寺を自分で建てたといふことは愉快でない。これで地獄にだけは行かずに済むかも知れない。壁画や襖絵は十三枚ほどあるが、これは全部自分が揮毫する。いま春陽会(第十一回春陽会展)に出品してある『石上』も事に依つたら此の寺に持つて行かうと思ふ。三十三枚の中、一枚は十六羅漢を描きたいと思つてゐるが、これには自分の知人で羅漢相のある人間の似顔にしたいと思ふ。たとへば、横山大観、山本鼎、山崎省三、死んだ森田恒友や押川春浪など、これも供養位にはなるだらうと思つてゐる。」(写真は小杉画伯)

『都新聞』 昭和八年五月 日